体育専攻学生のスポーツ価値意識に関する研究（II）
―競技動機との関連から―

浅沼　道成*，森　　司朗*

A Study of Sport Attitudes among Students of Physical Education Courses (II) — From Motives of Games —

Mithinari ASANUMA*, Shiro MORI*

Abstract

The purpose of this study is to clarify the sport attitudes among students of physical education courses. This study is based upon the questionnaires given to 918 students in five (two national and three private) universities. A comparative study of Sport attitudes was made, constituted of four types; "Leisure Type", "Recreational Type", "Agon Type" and "Asceticism Type" from the game motives. And the game-motives were measured by TSMI.

The findings indicated that most Sport attitudes were of the "Asceticism Type" with the high game-motives. It was also found that the asceticical and instrumental orientation were related to high motives.

KEY WORDS: *Sport Attitude, Student of Physical Education Course, TSMI*

はじめに

日本の体育大学におけるスポーツの位置づけとは如何なるものなのか。また，一般の人々の体育大学に対する意識とは教育的場面を除けば競技スポーツにおける活躍ではないだろうか。即ち，体育大学の学生は一流の競技選手でありその役割を期待されているのかも知れない。しかし，現実にはどうであろうか。実際に高校まで競技レベルの高い学生が多く入学していると思われるが，授業数やその内容，練習環境等必ずしも競技を続けていく環境としてはベストな状況とは言えないだろう。また学生（競技選手）側の問題も様々に考えられ，特に経験的観察から学生のスポーツ（競技スポーツ）に対する意識や取り組み方に曖昧な面がみられるのも事実であろう。

この様な状況に対して本研究では学生側のスポーツに対するスポーツ価値意識（スポーツ観）の視角から説明をしていきたい。前回の報告[1]では上杉のスポーツ価値意識の四類型（注１）をもと

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

に林の数量化Ⅲ類によるスポーツ価値意識のパターン分析を行った。その結果，体育専攻学生が「世俗内禁欲タイプ」の価値意識を明確に持っていることがわかった。しかし，この価値意識と競技スポーツとの関わりを明確にはできなかった。即ち，体育専攻学生のスポーツ価値意識が現実に競技スポーツとどの様に関わっているのかが明かにされなかった。佐伯[3]は「スポーツが存在し発展するためには，スポーツを人間と社会にとって望ましいものとして意味づけ，スポーツを支持し，正当化する観念が必要である」と述べ，スポーツ観を「個人及び社会に対してスポーツの存在意義と価値を明示し，その意義と価値を実現するようにスポーツを方向づけ，統制する」ものとして捉えている。この立場から捉えれば，現実に体育専攻学生がどの様なスポーツ価値意識を持ち，またその価値意識によって競技スポーツをどの様に方向づけ，統制しているのかといった問題がでてくる。よって本研究では具体的に態度レベルから体育専攻学生の四類型の価値意識がどの様に競技スポーツを支持する動機と関わっているのかを明らかにすることによって課題解決の糸口としたい。

研究の方法

1．データ

平成元年度に実施された質問紙法による「体育専攻学生の生活実態とスポーツ意識について」の調査（注２）で得られたデータの一部を利用した。データはスポーツ価値意識に関わる16項目中，「禁欲性」「即時性」「手段性」「自己目的性」に関する質問（５段階評定法による）を各々３項目づつ選んで計12項目を採用した。またサンプルは国立と私立に所属する１年生と３年生の体育専攻学生であり，その内訳は Table 1 の通りである。

2．分析の方法

a．概念図式

本研究において「競技スポーツを支持する」とは競技スポーツ行動にどのようにたづさわっていくかといった意識レベルで捉えていく。即ち，今回の研究では行動レベで捉えるのではなくその行動を導く態度レベルで検討していくことを目指す。具体的には価値意識と動機の関係を社会心理学の態度研究[8]における概念図式（注３）に求め，行動に結びつく以前の態度（評価的成分から動機的成分への関係）を考察していく。本研究では特に競技スポーツを念頭においているため動機に関しては競技動機を考察の対象としていく。

b．スポーツ価値意識

本研究でもスポーツ価値意識は上杉の四類型[6]を採用した。また４つの志向性に対してそれぞれ３つの質問（計12問）に対し「強くそう思う」，または「そう思う」と答えた場合に１点としその合計の点数によってそれぞれの価値意識の程度を測定した。例えばアゴンタイプの場合，２つの禁欲性の質問と１つの手段性の質問に「そう思う」と答えれば３点となり，最高が６点でこれを明確な価値意識とした。

c．競技動機

競技スポーツを基準にして価値意識を検討していくために，日本体育協会競技動機調査（TSMI）[2]の17の下位尺度から，より競技スポーツへ取り組むための動機として「目標への挑戦(MOKU)」，「勝利志向性（SYOURI）」，「不節性（FUSE）」，「練習意欲(RENSYU)」，「競技価値感(KYOUGI)」，「計画性（KEIKAKU）」の６つの項目を選択し採用した。

Table 1　Characteristics of the sample

属　性	大　学		学　年		性		入学方法	
	国立	私立	1年	3年	男	女	推薦	一般
体育専攻学生 n＝918	44.0	56.4	50.3	49.7	72.2	27.8	53.3	46.6

結果及び考察

1．スポーツ価値意識(四類型)と競技動機の関係

Figure 1は明確な価値意識群の各々のタイプの志向性の質問にすべて「強くそう思う」,「そう思う」と答えた（6点）集団とそれ以外の中庸的価値意識群のモデルであり，Table 2はその属性を示している。またFigure 2は明確な価値意識群における各々のタイプの集団に対するTSMIの結果をスタナイン尺度得点で示したものである。各タイプの人数は当然であるが前回の研究結果を支持するように明確な世俗内禁欲タイプと中庸タイプが圧倒的に多くその他のタイプはごくわずかにみられるだけである。また属性から世俗内禁欲タイプと中庸タイプの集団は全サンプルの属性傾向とほぼ同様の構成になっている。Figure 2は相対的にアゴンタイプや世俗内禁欲タイプがレクリエーションタイプやレジャータイプよりも競技動機が高い傾向を示している。特に勝利志向性を除いて世俗内禁欲，アゴン，レクリエーション，レジャータイプの順に競技動機が高くなっている。このことは世俗内禁欲タイプがアゴンタイプよりも競技スポーツを支持する価値意識になっているのではないかと考えられる。しかし，方法論的に異なるが上杉[6]は一流競技選手においてアゴンタイプが半数以上を占めているという結果を報告している。この結果を踏まえて考えれば，この傾向は高いレベルで競技スポーツと取り組んでいる選手の中で体育専攻学生(あるいは仮説的に高校生も含めて)だけに顕著な特徴ではないかと考えられる。即ち，学校スポーツの特徴である自己目的的というよりも手段的にスポーツを捉えるといったスポーツによる社会化[4]の影響を強く受けている結果だと思われる。

よって今回の結果である高い競技動機も世俗内禁欲タイプとセットで出現してくるといったわけになる。しかし，本研究において「手段的にスポーツを捉える」という内容が明白に捉えられきれ

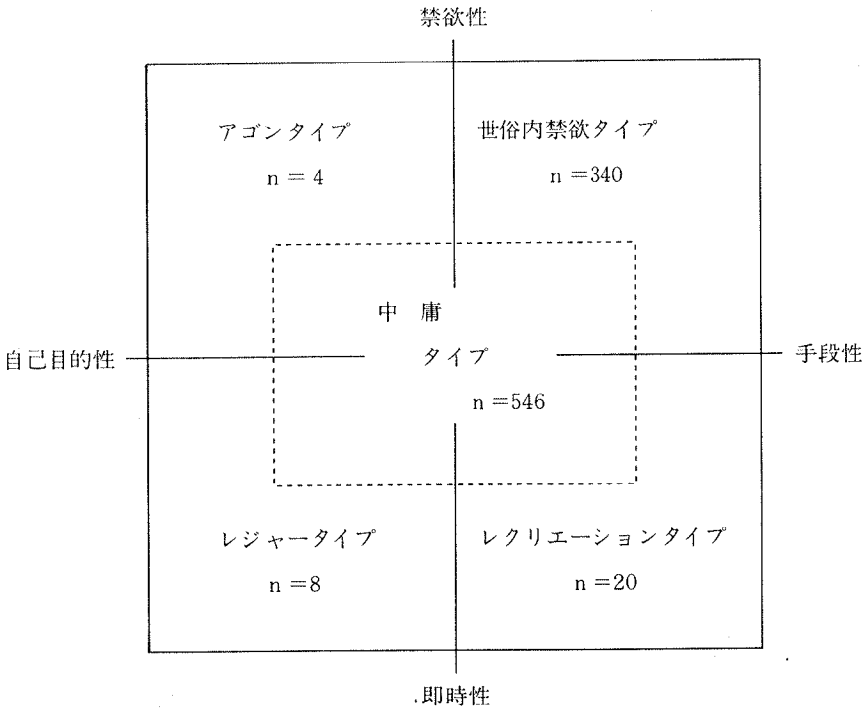


Fig. 1 Sports Attitudes among Students of Physical Education Coures

ていないために踏み込んだ考察は今後の課題としたい。

2．各志向性と競技動機の関係

Figure 3は各志向性（禁欲性，即時性，手段性，自己目的性）の質問にすべて「強くそう思う」，「そう思う」と答えた（3点）集団に対するTSMIの結果をスタナイン尺度得点で示したものである。各々の下位動機を従属変数とし，各志向性を独立変数として一元配分散分析(SCHEFFE法)[5]を行った結果，目標への挑戦，練習意欲，競技価値感，計画性において即時性と手段性・禁欲性，および自己目的性と手段性・禁欲性との間に5％水準で有為な差が認められた。また勝利志向性においても即時性と手段性・禁欲性，および自己目的性と禁欲性との間に5％水準で有為な差が認められた。また不節性においても自己目的性と禁欲性の間に5％水準で有為な差が認められた。この結果よりいくつかの下位動機を除いて禁欲性と手段性は即時性と自己目的性よりも高い競技動機を持ってい

Table 2　Size of Sport Attitudes

属性		明確な価値意識群				中庸的価値意識群
		アゴン	世俗内禁欲	レクリエーション	レジャー	中庸
大学	国立 n＝404	0.7	39.1	2.0	1.7	57.5
	私立 n＝514	0.2	35.4	2.3	1.0	61.1
学年	1年生 n＝462	0	37.6	2.0	0.9	59.5
	3年生 n＝456	0.9	36.4	2.4	0.9	59.4
性	男 n＝663	0.3	35.1	2.3	1.1	61.2
	女 n＝255	0.8	41.9	2.0	0.4	54.9
入学※	推薦 n＝489	0	38.4	2.3	1.2	58.1
	一般 n＝428	0.9	35.5	2.1	2.1	61.0

※不明1人

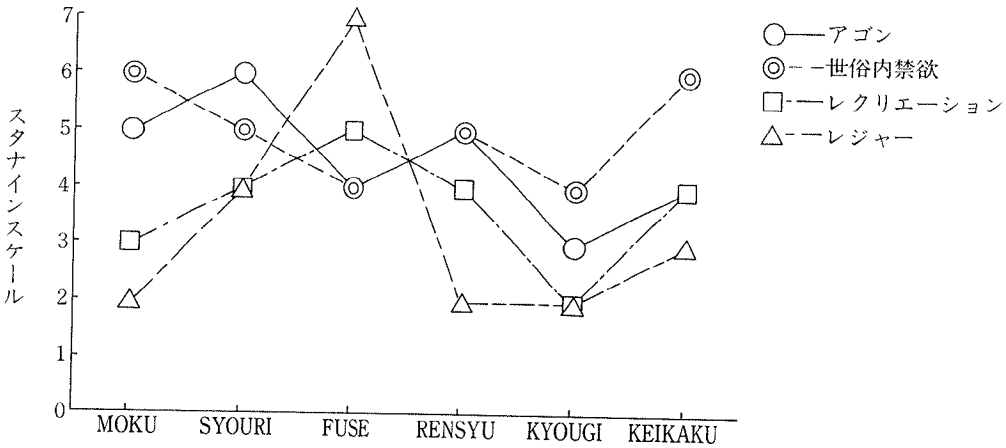


Fig. 2　TSMI by Sport attitudes

ることがわかった。また折れ線グラフの形状から禁欲性と手段性が，そして即時性と自己目的性がそれぞれ同様の競技動機のパターンを持っている傾向を示している。

これらの結果，体育専攻学生の四類型の中で世俗内禁欲タイプがもっとも高い競技動機を持ち，次にアゴンタイプとレクリエーションタイプが位置し，レジャータイプがもっとも低い競技動機を持っているという階層構造があると考えられる。また，Figure 2における競技動機の高いアゴンタイプの傾向はサンプル数の少なさに影響を受けているものと考えられる。

よって，体育専攻学生において禁欲性と手段性という志向性が競技動機を高めるように影響していると考えられる。

3．価値意識のレベルと競技動機の構造

これらのFigure 4-7は価値意識タイプのレベルごとにTSMIの下位動機のレベルを見たものである。特に明確な価値意識として出現してこなかった中庸的な存在を各々の価値意識の側面から構造的に捉えた形になっている。人数的には表2より世俗内禁欲的タイプが815人，アゴン的タイプが403人，レクリエーション的タイプが246人，レジ

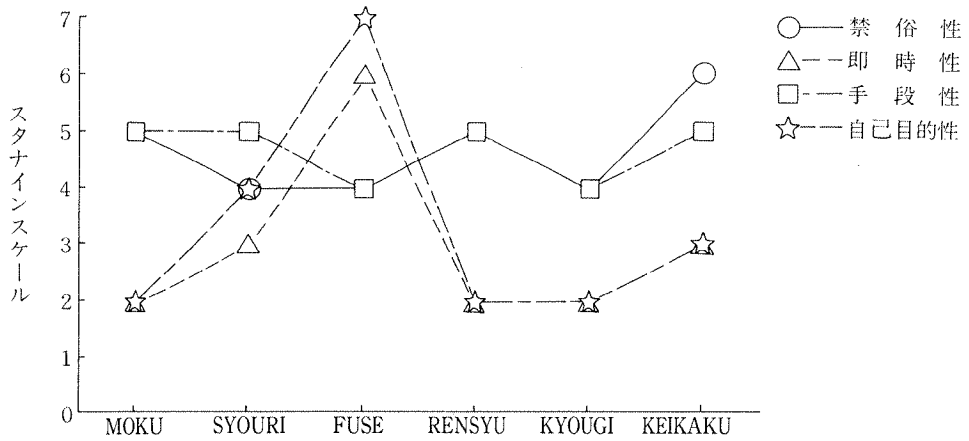


Fig. 3 TSMI by Sport-orientation

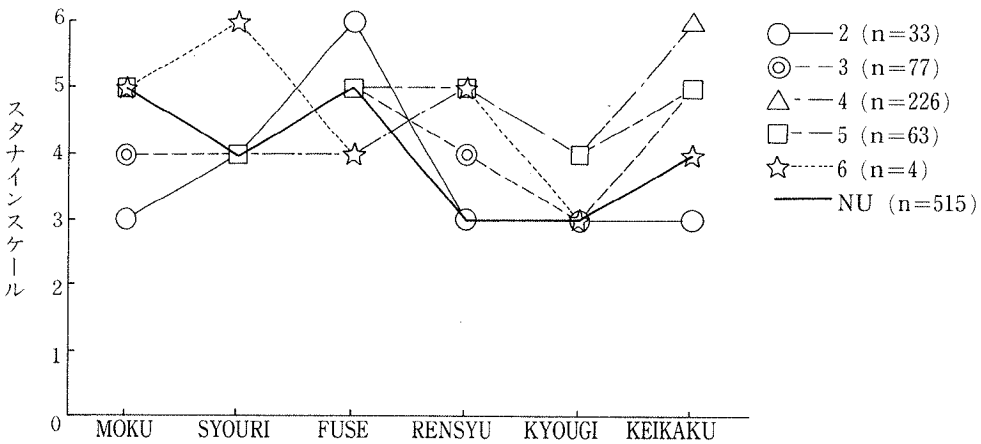


Fig. 4 TSMI by Degree of Sport-attitudes: Agon Type

ャー的タイプが193人であり，それ以外は四類型を構成している志向性のペアのどちらかの質問にすべてあるいは一方の質問すべてに「どちらとも言えない」，「そう思わない」，「全くそう思わない」と答えた中庸的タイプ（NV）がそれぞれ存在している。したがって各価値意識ごとに検討してみると，相対的にアゴン的タイプと世俗内禁欲的タイプは各レベル一般に競技動機が高い傾向にあり，レクリエーション的タイプとレジャー的タイプはその逆の傾向を示している。また世俗内禁欲的タイプとレジャー的タイプがレベルに従った人数構成，及び競技動機の高低の構造を持っており，この面からも世俗内禁欲的タイプの学生が主流をなしておりレジャー的タイプの学生は希少な存在であることがわかる。即ち，ここでも相対的に世俗内禁欲的タイプやアゴン的タイプがレクリエーション的タイプやレジャー的タイプよりも競技動機が高く，また世俗内禁欲的特性を備えた集団が大勢を占めている。その他に中庸的タイプは各下位動機の平均に対する標準偏差が高く，かなり分散した動機レベルを持った集団と考えられる。

よって，これらの結果，現在体育専攻学生の中で「世俗内禁欲タイプ」以外にその他の価値意識が明確な価値意識として出現しにくい構造になっていると考えられる。

次に各々の下位動機に注目してみると勝利志向

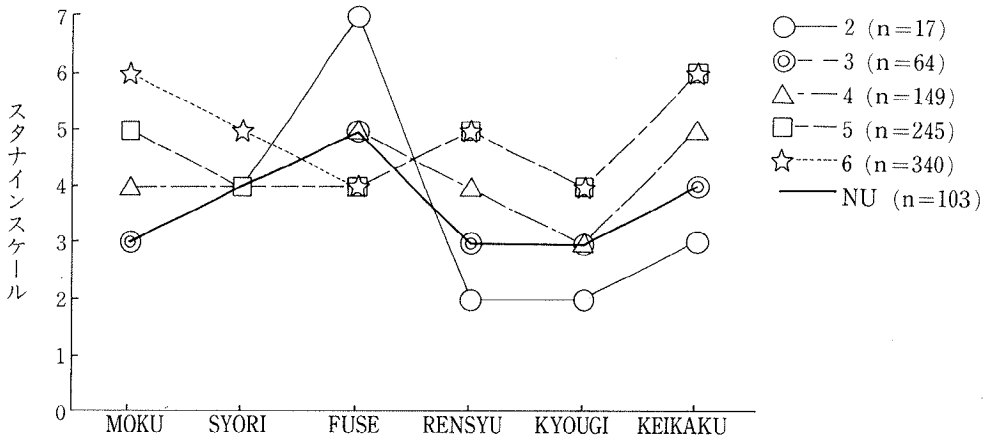


Fig. 5　TSMI by Degree of Sport-attitudes: Asceticism Type

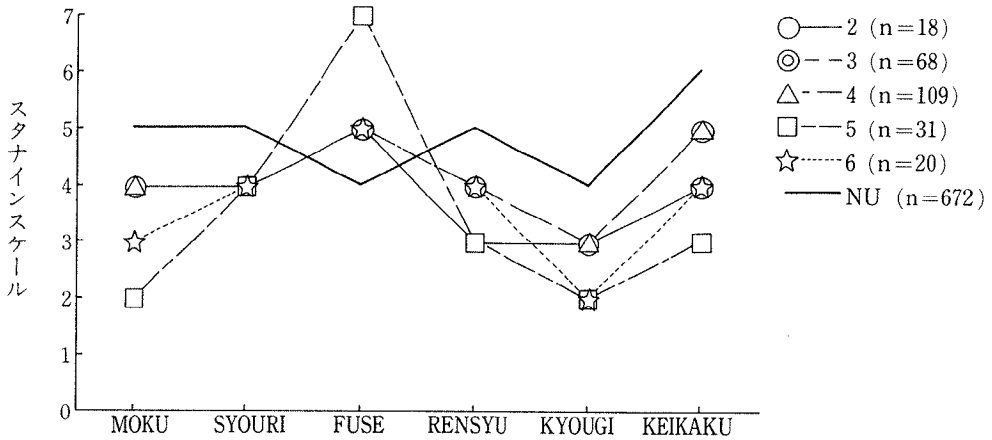


Fig. 6　TSMI by Degree of Sport-attitudes: Recreationai Type

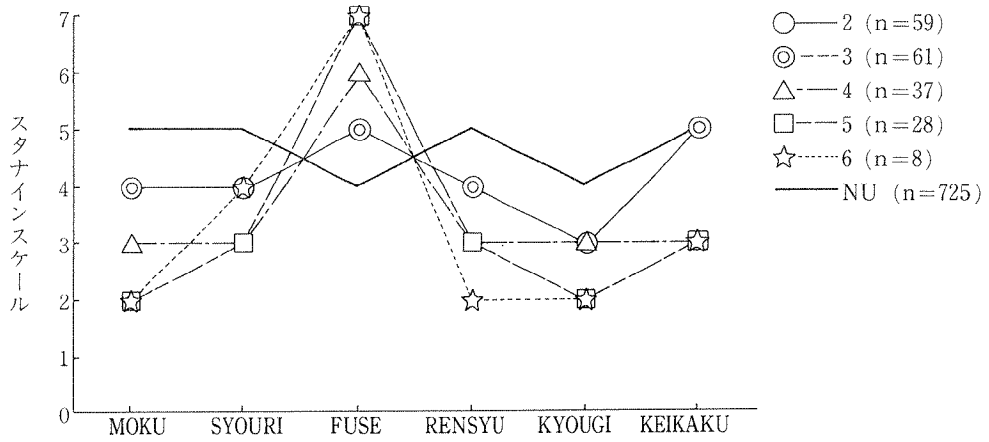


Fig. 7 TSMI by Degree of Sport-attitudes: Leisure Type

性において価値意識のタイプとレベルが一元的な値に収束する傾向がみられる。このことは勝利志向性の動機が体育専攻学生の中で価値意識に余り影響されない一定した競技動機だと考えられる。即ち，全般的にこのデータから体育専攻学生は「勝利」に対して動機や価値意識の高低に関係なく一定の意識レベルを持っているということになる。

ま と め

今回の研究は体育専攻学生内におけるスポーツ価値意識と競技動機の関連を検討してきたに留まる。その結果，真の意味で競技スポーツを支える態度を検出できてはいない。ただ相対的関係の中で体育専攻学生のスポーツ態度が，特に価値意識の視角から明らかにされた。以下がまとめである。

1．価値意識のパターン分析の結果と同様に明確な価値意識として体育専攻学生は世俗内禁欲タイプを持ち，その他の価値意識はほんの僅かであった。

2．また，相対的に世俗内禁欲，アゴン，レクリエーション，レジャータイプの順に競技動機が高い傾向を示した。ただし，前の2タイプと後の2タイプとは明らかに競技動機における傾向（高低）を異にしていた。

3．四類型を構成する志向性の中で相対的に禁欲性と手段性において競技動機が高い傾向を示した。要するに体育専攻学生において世俗内禁欲タイプが一番高い競技動機を持つことを裏付けた。

4．体育専攻学生の全体構造は約9割が世俗内禁欲的タイプ，以後アゴン的タイプが約4割強，レクリエーション的タイプが約2割5分，そしてレジャー的タイプが約2割を占めていた。この結果は各志向性で重なりあっている部分はあるが，競技動機との関連から世俗内禁欲的タイプが主流を成していた。また中庸的タイプは競技動機において一定の特徴を示すが分散が高くまとまった態度とは言えなかった。

以上のことより，体育専攻学生は世俗内禁欲的価値意識を持ち，高い競技動機から競技スポーツに積極的な態度を示す可能性を秘めている。しかし，僅かではあるがレクリエーション的・レジャー的価値意識を持った競技スポーツに消極的な態度の学生も存在していることもわかった。今後様々な一流競技選手等と比較検討を進め，世俗内禁欲タイプが体育専攻学生だけの特徴なのかどうかを検討していく必要がある。

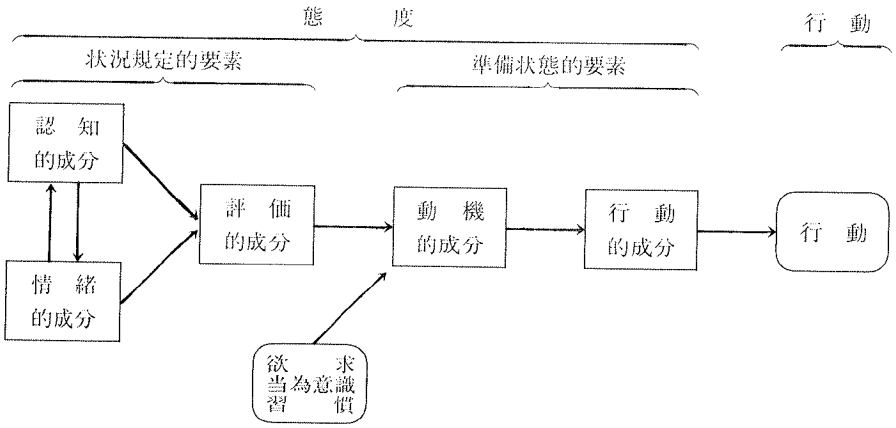
注1．この類型は上杉がどのようにスポーツに取り組むかという選択に関わる方向から「禁欲性志向と即時性志向」の軸と，どのようにスポーツを意義づけるかという選択に関わる方向からの「手段性志向と自己目的性志向」の

軸から分割された四つの型からできている。

注２．体育学部を持つ国立大学２校と私立大学３校の１年生と３年生を対象に，平成元年５月（Ｋ１）と平成元年９月から10月（Ｔ１，Ｋ２，Ｏ２，Ｆ２）に実施された質問紙法による調査である。

注３．

態度の５成分と動機および行動との関係



※安田ら編：基礎社会学，第１巻．東洋新報社，1980，p.33より引用．

参考文献

１）浅沼道成：体育専攻学生に関する研究，体育・スポーツ社会学研究９，道和書院，1990，p．23－39．

２）日本体育協会スポーツ科学委員会：日本体育協会医・科学研究報告，No.Ⅲスポーツ選手の心理的適性に関する研究第３報，1981．

３）佐伯聰夫：スポーツの文化,「スポーツ社会学の基礎理論」，菅原編，不味堂，1984，P．67－98．

４）多々納秀雄：スポーツ行動における行動特性と態度・価値パターンに関する国際比較研究，昭和58年度科研究補助金研究報告，九州大学健康科学センター，1984．

５）垂水共之，西脇二一，石田千代子，小野寺孝義：新版SPSSX 解析編１，東洋経済新報社，1990．

６）上杉正幸：大学生のスポーツ価値意識について（5），香川大学教育学部研究報告，Ⅰ－67，1986．

６）上杉正幸：スポーツ価値意識のパターンとその規定要因に関する研究，科学研究費補助金（一般研究Ｃ）研究報告書，1990．

８）安田三郎，塩原　勉，富永健一，吉田民人編：基礎社会学，第２巻，東洋新報社，1980，pp．29－46．